

2018年度作文コンクール

安全振興会では、生徒の皆さんの安全意識の向上を図るために、「安全」又は「健康」をテーマに作文コンクールを実施しています。今年度も素晴らしい作品が多数寄せられました。萬俣好明委員長、宮代哲彦副委員長、萩元幸治、井上謙、高梨智、清野史康委員の6人の元校長先生に審査をお願いしました。最終選考会では、最優秀2編、優秀7編、佳作40編が決定されました。この中から最優秀に選考された作品を掲載しました。

最優秀賞

小さなボタンが救った命

県立大和西高等学校 二年

加藤 碧梨

私の目に映ったあの一場面は今でも消えることはない。当時小学校五年生だった私は、とても大きなことに立ちあつた気持ちになつた。それと同時に、私の心の中に突き刺さつてとれなくなつた。あの日、私は駅から家へ帰る途中だった。踏切で足を止め、そこにいた誰もが強い日差しの下で「まだか、まだか」と額に汗を流し待っていた。なかなか踏切は開かず、私はだんだんとイライラして来た。やっと棒が上がり、皆が一斉に歩みを進めた。この時、私の隣には一人のおばあちゃんがいた。両手に重たそうなビニール袋を持ち、帽子を深くかぶり一緒に並んで待っていた。「重たそうだな、大丈夫なのかな」と私は心の中で思っていた。

踏切を渡り終えそうになつた時、私はふと思ひ出した。「あれ。あのおばあちゃんが隣にいない」。私は慌てて周りを見回した。おばあちゃんはいない。人は流れにそつて渡つていたため、「後ろにはいないだろう」と勝手に思い込んでいた。踏切を待っていた人は皆渡り終え、前を探したが見当たらない。「もう渡つたのか」と少し不思議に思い、ふと後ろを見た私は言葉を失つた。潮が引くように人がいなくなつた踏切のちょうど中央に、おばあちゃんが倒れていた。両手に持ったビニール袋は手から離れ、破れて中身に散らばつていた。私はその光景に驚くことしかできず、ただその場に立ちつくしていた。「どうにかしなきゃ」。私はそう心で思っていた。だが、どうしても体が動かない。声を出そうとしても、誰に話しかけたら良いか分からぬ。

その時、私の横をスツと駆けていく男の子が視界に入った。もう既に踏切が閉まり始めていたが、その男の子はおばあちゃんの所へと向かつていった。カインカインという音が、男の子を急がせるかのように入るさく鳴り響いていた。男の子はおばあちゃんに近寄り体を起こした。そして、こちらに戻つてきたと思つた瞬間、踏切の脇にあつたボタンを押した。その後、おばあちゃんは無事駅員さんによつて運ばれていった。

私は何もすることができなかつた。もしかすると私が初めに気付いたのかも知れない。今思えば、あの男の子は私よりはるかに年下に見えた。また、あのボタンが非常ボタンだったことを私は後から知つたのだ。とても自分が情けなく感じたのをよく覚えている。あの時、男の子は間違いなく一つの命を救つた。この光景は、私の心を強く動かした。

これを機に私は「交通安全とは」と考え直した。自分の命だけではなく、人の命を救うこともできるのだと知つた。事故を見て立ち尽くすのではなく、誰かのために、すぐに行動できる人間になりたいと強く感じた。

最優秀賞

私が死んだら助かる命

県立大船高等学校 二年

郷右近 夏海

臓器を分け与える。私は高校二年生の夏、初めてその意思を示した。小学生の時に知つた臓器提供。私は、なんて恐ろしいことなのだろうと思つた。そして絶対に嫌だと感じた。しかし、沢山の経験と出会いを経て高校生になつた私は知つていた。臓器移植に、持てる希望の全てを託す人がいることを。だが、同時に「自分が脳死してしまつた時、死んでしまつた時。体に傷つけて臓器を取り出される私を見て家族はきつと悲しくなる。」と考えたら、簡単に臓器提供意思表示カードにサインはできなかった。

今できること、行き着いたのは献血だった。「あなたの勇気で助かる人がいます！」駅前でたまに見かける献血への呼びかけ。それまでは、まだ子どもだからとどこか他人事のように感じていた。しかし、調べてみると十六歳だった私は、もうその活動の輪に参加できると分かつたのだ。

初めての献血はとても緊張した。帰り道、自分の左腕に貼られた白いガーゼを見て私の血が誰かに届けられるのか、と実感が湧いた。そして、献血ルームで看護師さんに掛けられた言葉を思い出した。「勇気を出して来てくれてありがとう。」彼女は、自分の半分の時間も生きていないであろう私に対して、丁寧に丁寧にそう言った。顔も名前も分からない、これから輸血を必要とする人たちの為にこんなにも心を込めて行動できるのかと思つた。その愛に満ちた姿が、私に死後の臓器提供を決意させたのだ。

私は愛おしい家族、友人、大切な人たちと未来を紡いでゆく為に絶対に死にたくない。そう思えるだけの幸せな日常がある。それでも、事故で死んでしまふ人がそれを事前に知ることができないように、もしかししたら私にも突然最期が訪れるかもしれない。その時、私は偽善者と言われるとしても、誰かの命を救う手助けをしたい。私が持つ夢も希望も、描く未来も全部その臓器に込めて分け与えてあげたい。

自分の命、人を助けたい気持ち。天秤にかけるならば、私は前者を選びたい。しかし、それと同じように生きたいと願う人たちがいることも考えなければならぬのだ。人の生死を考えるのは難しい。そして健康の価値はあまりに大きい。